

豊かな感性と、確かな思考をはたらかせて

——愛晃会文化賞に寄せて

田近洵一

(東京学芸大学名誉教授・前早稲田大学教授)

《総評》

愛晃会文化賞への期待

今年の文化賞の特長の一つは、応募作品がさまざまなジャンルにわたっていたということでした。ここ数年のところ、特に小説が多かったのですが、今年は社会的な問題や人間の生き方をとらえて書いたエッセイや論説が目立ちました。また、調査したり、研究したりして書いた小論文にもいいものがありました。いろいろなジャンルの表現に取り組んでみることは、自分の可能性を探る上でもいいことだと思います。ただし、今年は、日常の生活を記録的に書いたものや、身近な問題をとらえて思索を深めていったものが少ないのは残念なことでした。

中学校二年生の応募が主になるのは愛晃会賞の特徴ですが、今年も三年生や高校生からの応募があったことはうれしいことでした。

た。特に、去年に続いて優れた作品を応募してくれた中学校三年生のS・Yさんの作品は、かなりレベルの高いものでしたし、また、高等学校二年生のS・Fさんの作品は最優秀賞に輝く優れたものでした。

今年応募してくれた中学二年生の皆さんに呼びかけたいことは、来年も是非、この文化賞にチャレンジしてほしいということです。この愛晃会文化賞のような、自由な表現の場があるのは愛晃学園だけです。ここは、学校の勉強とは違う自由な表現の場なのです。皆さんにとっては絶好の表現の場だと思って、それぞれ思い思いの作品を書いて、個性を発揮してみてください。

海外研修体験記の価値

今年の海外研修体験記（パディントン賞応募作品）には、どのようにして英語への抵抗感をなくしていったかに視点を置いたものが多く、語学研修の意義を改めて感じさせられました。海外研修記の書き方には、大きく分けると二つの書き方があります。その一つは、事実の記録に重点を置いた記録文的なものです。特に現地での英語体験を正確に書き留めたものは、語学研修とはどのようなものかを知りたい人、特に後輩たちにとってはとても参考になると思います。もう一つは、印象に残った体験に焦点を絞り、感想を交えながら書いたエッセイ的なものです。今回の海外研修記には、記録文的なものもあればエッセイ的なものもありましたが、共に良かったのは、事実がしっかりと書けているということでした。

《 作品 評 》

愛 晃 会 賞 (最 優 秀 賞)

S・F「長崎の原爆から思う」(小論文、高二)

長崎の平和祈念式典に参加して原爆資料館を訪ね、フィールドワークなどを通して核兵器の悲惨さを心に深く刻んだ筆者は、この文章を書くことで、改めて核兵器廃絶への思いを深くすると共に、そのこととの関係で、自分の生き方を見きわめようとしています。具体的には、原爆の悲惨さを被爆の跡の上にしっかりととらえていることはもちろんですが、更に、英国における反核運動や、朝鮮や中国の人々の被爆の現実、被爆者永井隆博士の医療活動、更には、核兵器禁止条約に参加しなかった日本政府の姿勢にまで、視線を向けていっています。そして、医師を目指している者として、「日本から世界の平和運動に貢献しつつ、他人のために捧げられる医師になりたい」と思うとともに、長崎市長の「あなたたちは、種をまきに来ている。」という言葉を重ね受け止め、胸に刻んでいます。

長崎を訪ね、そこで見たこと、聞いたことを自分の生き方との関係で心に深く受け止めていること、そのものの見方の純粹さと思索の深さ――そこに、これからの時代を切り拓いて行く高校生だからこそその思考の充実と精神の高まりとを見ることが出来るように思います。「医療者の視点から平和を願い活動する、そんな医師になる」という強い筆者の思いに、心からのエールを送りたいと思います。

審査委員長賞

U・N「共に生きる」(エッセイ、中二)

ダウン症の妹が「最近できるようになったことがあります」と書き出して、「『はい』『いいえ』を使い分ける、計算をする、プールでビート板を使って泳ぐ、など。」と、妹の成長を具体的な行動の上にしっかりと見ているところ――それは、まさに姉として「共に生きる」ことを実感している筆者だからこそその思いだと思います。妹の様子を淡々と書き記す言葉の端々に、筆者の、妹への深い愛情を感じさせられ、感動させられます。

特に考えさせられたのは、「障がい者」というように、筆者は「害」の字をひらがなで書くということでした。「障がい者」という表記は、「害」の字で正常者と区別される現実への抵抗だと言っていていいでしょう。そして、「誰も、生まれたくなかったのに生まれた、とは言いません」という強い言葉は、姉としての愛情の表現を越えて、共にこの世に生きる者としての立ち位置を明確にした、まさに一人の人間としての揺るぎない共存の思いが込められた言葉のように思います。それは、筆者にとって、共に生きる者としての、確かな自己確認にもなっているのだと思います。

この作品は、ダウン症の妹と生活の現実を共にし、深い愛情を持って、その成長を身近に見ている筆者だからこそその文章です。そして、更に言うなら、これは、姉妹の個人的な関係を越えて、共に生きる者としての、この世に生きることのかげがえのなさに対する、人間的な感情に根ざした自己確認の書だと言ってもいいだろうと思います。

審査委員長賞

○・A「小児がんを考える」（小論文、中二）

テレビのドキュメンタリー番組で、小児の集中治療に献身的に取り組む医師の姿を見て深く感動した筆者は、同時に、小児がんという病気で帰らぬ人になってしまうことのある現実に強い問題意識を持ち、小児がんについて調べようと思います。そして、進んで、二つのゼミナールに参加します。中学校二年生の、この筆者の姿勢が、この充実した小論文を支えています。

筆者は、二つのゼミナールを通して、小児がんが「いまや治る、治せる病気」になりつつあるとは言え、まだ「二〇%から三〇%の子どもたちに日常を取り戻してあげることが難しい」という現実と、にもかかわらず「小児がんの研究は、思ったほど進められていない現状」を知ります。そして、「何か私にできることはないだろうか」と考えた筆者が、支援の方法として着目したのは、「レモネードスタンド」という活動でした。その活動の原点について調べた筆者は、アメリカに小児がんと闘っていた少女がいることを知り、深い感銘を受けると共に、その活動を促進していくことが大事だと考えます。

この文章は、小児がんの現実をとらえると共に、小児がんにかかった子どもに救いの手を伸ばすにはどうしたらよいかを考え、自分たちの晃華学園でもできる方法があることを明らかにしたものであって、まだ具体的な一歩を踏み出してはいませんが、問題をとらえ、その解決を求めた、中学生らしい誠実な小論文として評価できるものだと思います。

特別賞（文化部長賞）

S・Y「入道雲の向こう側」（小説、中三）

ここで語られているのは、主人公が、将来、宇宙飛行士になりたいという夢を語る少年と出会いますが、それは、死んだ妻が、絵本の中に描いていた少年だったという、そんな不思議な物語です。

妻の墓参りをすませた主人公が、帰り道の公園で自販機の炭酸飲料を飲んでいると、マコトと名乗る少年に声をかけられます。この物語は、そんなごく日常的な出来事から語り始められます。ところが、その少年は、主人公の家のこと、例えば中学二年生の息子のことや、死んだ妻が描いた絵本のことなどを知っていて、「帰ったらクローゼットをあけて」と言って帰って行きます。主人公が家に帰ってクローゼットをあけると、そこには「しょうらいのゆめ」という題の妻が描いた絵本があり、それは、さっき出会ったマコトという名の男の子が、将来、宇宙飛行士になるという決心をする話でした。若い頃すでに絵に対する夢を捨てていた主人公は、死んだ妻の絵本の中で、将来の夢を語る男の子と出会ったのでした。主人公は、自分が捨てた夢を思い出し「絵、たまには描いてみるかあ。」と思います。つまり、妻の描いた世界との出会いが、現実の主人公に昔の自分の夢を思い出させることになったのでした。この物語の最後は、いささか物足りなく思われはしますが、主人公の生きる、現実の世界とは違うもう一つの世界が絵本の中に描かれていて、それが現実を動かすといった世界観は、とてもおもしろいと思います。この作者の才能に、特に期待したいと思います。

優秀賞

H・A「油流出問題解決に向けて考えたこと」(研究文、中二)

タンカー事故などによる原油流出に対する問題意識から、筆者は、流出した油をどうしたら除去することができるかということを実験によって明らかにしようと思いました。筆者の試みた実験は素朴なもので、決してレベルが高いものとは言えませんが、まずはこの筆者が、原油流出の問題をとらえ、自分のできるところで、その問題を解決する方法を実験によって明らかにしようとしたことに拍手を送りたいと思います。まず自分から問題をとらえること、そして自分のできるところで、問題解決の方途を探ること——今の中学生に、このような純粋な心を持ち、自ら一歩踏み出そうとする人がいることを、何よりも嬉しく思います。

研究レポートとして見ますと、先ず観点を明確にして、実際に三つの実験を行い、それを記録としてまとめるとともに、物理的な処理と化学的な処理との問題について結論をまとめていることは十分に評価したいと思います。実験の記録も、写真を使って正確になされており、研究レポートとしてしっかりしたものになっています。ただ、原油流出を問題とした研究としてみると、筆者が用意した油ではどのような問題があるかということや、ここで使用した界面活性剤の性質や働きなどについては、さらに十分な配慮が必要だろうと思われます。

なお、このような実験のあり方については、専門の理科の先生などのご指導を受けるようにして欲しいと思います。

優秀賞

T・H「カナエール」(エッセイ、中二)

児童養護施設からの進学希望者を応援する「カナエール」という奨学金支援プログラムのスピーチコンテストに参加して、そのプロジェクトの意義を知った筆者が、それに自分も積極的に関わろうとします。この文章は、そんな筆者の記録です。

筆者は「自分の過去と向き合い、みんなの前でスピーチする」子供たちの真剣な姿に感動します。ある男の子は、「自分のことを必死に考えてくれ、一緒に悩み、思いを共有しようとしてくれていた施設の職員」への言葉を口にしながら泣き、また何人かは「自分を生んでくれた母親への感謝の言葉」を述べて「生んでくれて、ありがとう」と言う。そんな話を聞きながら、筆者は、

「孤独に打ち勝ち、不安や恐怖に押しつぶされそうになっても、周りと手をつなぐ心の余白が彼らにはある」と感じ、「人間には変わるための期限などない。努力し続ければ、いつだって変わることができる」と言った彼らの「精一杯の言葉」に心を動かされます。そして、「人間として生まれたからには、その環境や境遇によって有利、不利などが生じるべきではない」と思います。

筆者は、カナエールのスピーチコンテストに参加することで、自分は人間としてどうあるべきかを考えたのです。このカナエールの一日は、これからの筆者のものの見方、考え方の基礎になることでしょう。その意味で、この文章は、筆者にとっては、価値ある一日の記録になることと思います。

パディントン賞

Y・Y「嗚呼、大いなる英吉利よ」（エッセイ、高一）

ホストファミリーの優しさに包まれた生活の中で体験したさまざまな出来事が具体的に描かれていて、現実味豊かなホームステイの記録になっています。特に貴重なのは、優しさや楽しさに包まれながらも、そこで感じたちょっとした感覚のずれ、あるいは、違和感のようなものをしっかりと書き留めていることです。例えば、ランチボックスの中のピーナツバターサンドのこと、回転寿司でのこと、ユニークなネーミングのことなど、ちょっとしたことではあるけれど、異文化との貴重な出会いの体験です。アメリカ英語に対する英国の人々の感覚と出会ったことの記録も、語学研修としては貴重だと思います。

しかし、筆者が最も重点を置いて書いたのは、後半のホストファミリーとのことです。そのいい思い出となった日曜日のことが具体的に描かれていて、この研修記録を実感に支えられたリアリティーのあるものにしています。特に、筆者は、ホストファミリーとの出会いを通して、英語が話せない自分に劣等感を持つのは間違いだったということに気づき、これは「始まりの終わり」だと思います。このことは、筆者にとって、海外研修で得た最も大きな成果だったと思います。

異文化と出会うと共に、劣等感を克服し、将来を思うに到る心理的なプロセスが具体的に描き出されているところ——そこに、この体験記の価値があります。

パディントン賞

T・M「イギリス語学研修体験記」(記録文、高一)

語学研修記には、「総評」でも述べましたが、事実を書きとめた記録文的なもの感想をまじえながら書いたエッセイ風なものがあります。この文章は、事実を即して記録的ではありますが、それも、自分を対象化して振り返ってみており、自己の思索のエッセイ風の記録となっています。

まず、筆者は、異文化との出会いが自分にもたらしたものに視点を置いて、日々の体験の自分にとっての意味を明らかにしようとしています。例えば、筆者は、ホームステイのすばらしい部屋に興奮しながらも、自分を振り返って「この気持ちを言葉でうまく言えず、後悔している自分もいた。」と書きとめます。また、ホストファミリーと話しながら、話したことよりも筆者にとって問題なのは、言いたいことは頭に浮かんでいるのに「それが英語として言葉にできないことが、痛感させられた」ことだと言います。二日目に入って、「英語が話せない」ということよりも「自分には積極性が全然足りない」とか、自分は「日本のことを知らない」ということを、自分の問題として自覚します。スーパーのレジの店員さんとのやりとりなどを通して、筆者は「様々な違いや考え方をものすごいスピードと量で感じていた」というように、自分の側の変化を意識して、そこに視点を置いて書いています。このように、筆者は、経験した事実の、自分にとっての意味を明らかにしようとして意識して書いているのです。つまり、物事を自己の変容とその自覚に視点を置いて描いています。それが、この研修記の筆者独自の優れたところだと思います。